韓国の伝統芸能の今

小林　美実

韓国の人々と親しくなってから、十七年たちました。

私が初めて韓国を訪れたのは、一九八〇年（昭和五十五年）のことでした。当時は入国にビザが必要な上、ソウルの子ども病院などでのボランティア活動（人形劇公演など）が目的の渡韓だったため、書類や説明などに時間がかかり、ビザの取得に苦労しました。もっともその頃は、アジアのどこへ行くにも、予防注射、ビザの取得などまだまだ大変な時代だったのです。

数年にわたり何度か韓国を訪れるうち、私たちの知らない韓国を知ることになりました。知らないというより、知ろうとしなかった、というべきでしょう。東京からわずか二時間、九州の博多からなら目と鼻の先

にあるこの国の現実を知って、私たちの生活とのあまりの違いに愕然としたことを覚えています。

二度目のソウル滞在中、年に一回行われる本格的な防空訓練を体験しました。夜、完全な暗闇と化した韓国全土の空に突如交叉するサーチライトの光に、私は自分の女学校時代を思いだし、この国が未だ戦争を終結していない休戦状態にあること、そしてこの首都ソウルの北、車でわずか一時間余の所にその休戦ラインがひかれ、そこでは常に国連軍と北朝鮮の軍隊が対峙していることを思いしらされたのでした。このような訓練が必要であること、そして男子は兵役の義務があり、大学生たちも在学中一定の期間軍隊にはいらなくてはならないこと、そのため大学では軍事教練が行われていることなどが、休戦という緊張状態の中で人々に納得されていることを知り、複雑な気持ちになりました。ほんの隣の国、日本では、当時、そして今も何パーセントの人がそのことを知っているでしょうか。

私の韓国の友人は、韓国を歴史上「喜び、悲しみの事件が一番多い国」といいます。大陸からつき出た半島の地には、大陸から、そして半島の先にある日本から、何度も侵略されてきたという歴史があります。このことは、この国のことを理解するのに重要なことなのです。

私たちを受け入れ公演活動を全面的に支援して下さる方で、著名な随筆家の李京姫女史に、或る時、朴李順さんを紹介されました。この人は無形文化財である伝統芸能「男寺党（なむさだん）」の座長であり、技能保持者、人間文化財として活躍している人でした。大変素朴な、しかし男性ばかりの集団をひきいる迫力を感じさせる女性でした。もともと「男寺党」は、「農楽」（打楽器を演奏しながらのアクロバットな動きと頭上の長いヒモの動きや、めまぐるしく変わる集団のフォーメーションの面白さをみせる）「人形劇」「曲芸」などを演じて村々をまわる放浪芸の集団でした。

彼女の家で一晩一座の人々もまじえて酒を飲み語りあった時のことです。

次第に気分が高まって来ると、彼女は目を細め、体をゆったり動かしながら朗々と歌いだしました。それにあわせるように、皿まわしの金さんがたちあがり、両手をひろげ、かかとで床を軽く打っては体をうかせるような身振りで踊りだしたのです。やがて朴さんも他の人々も歌いながら踊りに加わりました。それは踊るというより、大きくゆったりと舞う動きでした。李女史が言いました。「彼女は、あなたを歓迎する喜びを歌っているのです。ことばもメロディーも即興です。湧き上がってくる嬉しさが、止まることなく歌わせるのです。もう通訳する必要はないでしょう。あなたは私たちの嬉しさを感じられるはずですから」といって立ち上がり踊りはじめました。じっとしていられない気分でした。私も踊りの仲間になりました。時々むきあって踊る相手と互いに目をみあわせ、動きをあわせる。次第に歌も動きも激しくなる。この即興の舞は数時間続きました。帰りに朴さんは、突然一言日本語で「姉さん」と私に言うと、私の肩をだいて涙を流したのです。彼女は私より一歳若い。日本統治時代の貧しい辛い生活。やがてそれに続く朝鮮動乱の時代に、彼女は食べるためだけで放浪芸人の群れに入ったといいました。後に座長と結婚。そして座長の没後、この一座をひきい、無形文化財として国が認めるまでにしたその苦労が一度に噴き出るように思いだされたのでしょう。日本人である私に対する気持ちには複雑なものがあったと察しられました。「私は、日本人であるあなたと今夜気持ちがひとつになれた。それが嬉しい」。幾多の苦悩をのり越えた強さ、心に秘めた激しい感情が、彼女の声に歌にありました。

この一座の本当の舞台は、劇場ではなく、野外なのです。お客も土の上に座っている。マイクも無い野外でリーダーとしてしゃべり歌い、農楽ではドラを打っ

▲農楽パフォーマンス

て男たちに伍して歩く。韓国の伝統的な歌舞には、心と体のすべてを声に、動きにし、思いのすべてをはき出してしまうような強さ、すごさがあります。日本でも有名なチョウ・ヨンピルの歌にも、韓国の伝統的な語りのような歌謡「ばんそり」にも、韓国で生きる人のもつ強さ、ほとばしる激しさが同じように感じられます。韓国の土俗的な民衆の力が、感じられるのです。一方韓国には大変優雅な民族舞踊や楽器演奏があります。観光旅行でも観賞ができますが、一見優雅にみえて、実は激しいものがその奥に感じとれ、ただ「きれい」ではすませられないように思います。

当時韓国でこの一座の芸能は、あまり評価されていませんでした。放浪の芸人たちということで、私にひどいことばで評した知識人もいました。しかし李女史は、「今にこれが韓国の代表的な芸能と皆が認めるようになります」と自信をもっていました。

さて、今、どのようになったのでしょう。一座の芸

のうち、韓国の人々の心をことばでなく音とリズムと動きで最も激しくゆさぶると思われる農楽、これが若者たちに盛んに演じられています。おそらく韓国の全大学にこのグループがあると思われます。大学のグラウンドで軍事教錬をしているもう片隅で、このにぎやかな農楽の練習をしているといった場面にも出会いました。日本でも、在日韓国の人々が、お祭りやパレードでにぎやかに堂々と演じ、皆の心を興奮させています。「男寺党」から世界的に活躍する有名なパーカッション・グループ（打楽器集団）「サムルノリ」のメンバーがでました。芸術的な演奏グループになった今も、彼らの音楽からは韓国の土俗的な匂い、強い激しい情念が決して消えていません。

十数年前、ソウルのある大学で、教育音楽の教授に、韓国の子どもの伝承あそびやわらべうたについて尋ねたことがあります。返事は「そんなものはありません」というそっけないものでした。しかしこれを責めることはできません。日本でも同じでしたし、私自身教師になったはじめの頃は、子どもを含む一般大衆の、生活の中で伝承される遊びや芸能に対し、全く興味を持っていなかったのですから。

昨年十二月、学生たちと韓国に行き、ソウルの幼稚園を訪れて驚きました。子どもたちが手に、うちわ太鼓のような韓国の打楽器（소고）をもっているのです。先生のまわりに集まって、先生の打つまねをしてたたきだしました。そのリズムは、三拍子の韓国独特のリズム、朴さんと踊りつづけた時のリズム、有名な民謡「アリラン」にもふさわしいリズムなのです。先生も子どもたちも、口三味線風に歌いながら体を軽く浮かせるようにゆらして、本当に嬉しそうにならすのでした。われわれ日本人には無いリズム、ゆれです。それを幼い子どもたちもしっかり受け継いでいるのです。あたりまえのようで、教育の場では忘れていることです。

▲소고(ソゴ)(小鼓)を打って楽しむソウルの幼稚園の子どもたちと日本の学生たち

韓国は変わりました。人々の生活は日本と変わらない豊かさになりました。しかし子どもの家庭での教育（しつけ）はまだしっかりと行われているようです。日本より激しい大学入学の受験戦争にもまれながら、しかし若者は本当に活気があり、すべてに前向きです。二年前から始まった「韓国大学人形劇フェスティバル」に全国三十余の大学から集まった男女の学生たちは、まだ人形劇は未熟でしたが、レベルアップする日が早いことをその熱気から十分感じとれました。

韓国は今も休戦状態でいるのです。依然として、ソウルのすぐ北には、休戦ライン、そして板門店があります。そのことを抜きにして、この国の教育も生活も文化も語れないということを知って欲しいと思います。

（宝仙学園短期大学）